

教育行財政論叢第11号発刊に寄せて

高 見 茂

本年も教育行財政論叢を無事出版することができた。それはもう第11号を数えるに至っている。最初の第1号が発行された時、筆者はまだ大学院生で、英国のケント県のバウチャー制度導入の調査研究についての報告書の分析を掲載して頂いた記憶がある。この原稿提出に当っては、指導教官の兵頭先生に一次稿を提出し、翌日研究室（今の渡邊先生の部屋）へ指定された時間に行き、じっくり2時間ほど指導を受けた記憶が鮮明に残っている。先生は原稿を読んで来てくださり、赤鉛筆を右手に持たれ、何度もチェックされながら問題点の指摘をしてくださった。一対一で先生の傍で指導を受けるのは緊張するものであった。当時の筆者は、表現方法の拙い点を何度指摘されても上達できず、先生から「何度言っても上手にならない！声に出して表現方法が馴染むものかどうか確かめてみなさい！」と厳しく指摘され、ガックリすることが度々あった。先生は原稿用紙に一枚一枚目を通されたが、何も言われずページをそのまま捲られた時は心底ほっとした。目を通して頂く原稿用紙が少なくなって来ると、心の中で「後XX枚！」と叫んだものである。

就職してから文章表現法の授業を担当することになり、課題づくりの材料として自分の院生時代の論文を読むことがあったが、われながら驚くほど文章表現力のある論文ばかりであった。よく考えてみると、それらは先生の手が入った論文だったからである。先生にご指導頂いた日々のことを思い起こし、教育行財政論叢と自分の縁に思いを馳せる今日この頃である。

平成19年度も校務は多忙で、特に文部科学省の委託研究は2年目も継続された。委託総事業費2336万円を受け、科研費の方と同時並行で研究作業を続けた。筆者の置かれている状況を講座の院生さんたちはよく理解してくれ、諸事業遂行に当っては全員戦力としてよく頑張ってくれた。たいへん有難いことであったと思う。講座関連の研究推進事業に加えて、関西教育行政学会の事務局運営でも少ない人数でよく支えてくれている。あらためて誌上をお借りして感謝の念を捧げたい。